

中 学 校

平 成 14 年 度

教 育 研 究 員 研 究 報 告 書

音

楽

東 京 都 教 職 員 研 修 セ ン タ ー

平成14年度

教育研究員名簿（音楽）

区市町村名	学 校 名	氏 名
新 宿 区	牛 込 第 三 中 学 校	○水 谷 実 岐
墨 田 区	吾 嬬 第 二 中 学 校	◎松 澤 郁 子
世田谷区	瀬 田 中 学 校	紅 林 昌 子
練 馬 区	石 神 井 南 中 学 校	□小 林 香 代
足 立 区	栗 島 中 学 校	菅 原 茉 莉
八王子市	松 木 中 学 校	○森 由 紀 乃
青 梅 市	霞 台 中 学 校	佐 藤 晴 美
国分寺市	第 四 中 学 校	野 口 大 介
三 宅 村	坪 田 中 学 校	木 田 兼 治

◎世話人 ○副世話人 □記録

〔担当〕 東京都教職員研修センター 指導主事 鈴 木 春 樹

目 次

I 研究主題設定の理由	2
1 教育課程実施上の課題は何か。	
2 音楽科の課題をどのようにとらえるのか。	
3 生徒や所属校音楽科の実態をどのようにとらえるのか。	
4 研究主題をどのように設定するのか。	
II 研究の内容と方法	4
1 「主体的に音楽をつくる」をどのように受け止めるのか。	
2 目指す生徒の姿をどのように設定するのか。	
3 研究の仮説をどのように設定するのか。	
4 目指す生徒の姿に迫る指導の手だては、どのようにあったらよいのか。	
5 指導の手だてを具体的にどのように考えるのか。	
6 実践事例からどのように仮説を検証するのか。	
7 各実践事例の意図は何か。	
III 研究の構想	6
IV 調査	7
1 最初、興味があっても授業が進むと満足感が少なくなる。	
2 楽曲や音楽活動への興味・関心のある生徒は、自己目標をもつ。	
3 調査の考察	
V 実践事例（実施順）	
1 音楽の聴き方を学ぶ鑑賞の指導 第2学年	8
題材名「オーケストラを聴こう」	
2 地域の人材を生かし、ペアで取り組む三味線の指導 第1学年	12
題材名「三味線に親しもう」	
3 生徒が自らの音楽をつくり上げる合唱の指導 第3学年	16
題材名「表現を工夫して感動できる合唱をつくろう」	
4 自分の音楽活動を振り返りながら取り組む篠笛の指導 第1学年	20
題材名「篠笛を吹こう」	
VI 研究の成果と課題	24

【研究の概要】

音楽を工夫して表現したり、音楽を聴いて自分のものとしてとらえたりすることが、生徒が主体的に音楽をつくりあげる活動と考える。音楽活動は創造的であるという立場に立ち、生徒一人一人が自己表現への願いをもって音楽活動をするようにする必要がある。そこで、授業の実施前と実施中における指導の手だてと評価規準及び評価基準を明確にし、教師の指導と生徒の活動から、指導の手だてについて効果を検証する。

生徒が主体的に音楽をつくりあげる指導の工夫

－合唱・和楽器・鑑賞の指導と評価を通して－

I 研究主題設定の理由

今日の生徒の状況は、受験競争、いじめや不登校問題、社会体験の不足など、豊かな人間性をはぐくむべき中学校の段階で、様々な課題が生じている。また、学力低下論の中、「児童・生徒に学習の目的を見つけられない傾向が見られ、学習意欲の低下が問題となっている。」という指摘もある。（「学習意欲に関する調査研究」国立教育政策研究所 平成 14 年 8 月）

このような状況の中、音楽科では、「生徒が感性を豊かに働かせ個性を生かして楽しく充実した音楽活動を展開し、音楽の喜びを享受できるようにする。」必要がある。（中学校学習指導要領解説、音楽編 平成 10 年 12 月 文部省）そのため、本研究では音楽科の課題だけでなく、教育課程実施上の課題、所属校の課題、生徒の実態から状況を整理し、音楽科の目標と照らし合わせ、研究主題を設定することとした。

1 教育課程実施上の課題は何か。

中学校学習指導要領では、次の方針に基づき教育課程の規準を改訂している。この中で、特に、「日本人としての自覚の育成」や「自ら学び、考える力の育成」「基礎・基本の確実な定着」は、音楽科の課題とも関連していると考ええる。そこで、下記の方針を教育課程実施上の課題として受け止める。

- ① 豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること。
- ② 自ら学び、自ら考える力を育成すること。
- ③ ゆとりのある教育活動を展開する中で、基礎・基本の確実な定着を図り、個性を生かす教育を充実すること。
- ④ 各学校が創意工夫を生かし特色ある教育、特色ある学校づくりを進めること。

2 音楽科の課題をどのようにとらえるのか。

中学校学習指導要領の改訂に当たり、改善の基本方針では、次の 3 点が挙げられている。

- ① 音楽を愛好する心情や感性の育成、音楽活動の基礎的な能力の育成、豊かな情操を養う指導の一層の充実
- ② 音楽科の目標にかかわること、生徒の音楽へのかかわりや、個性的、創造的な学習活動の工夫
- ③ 我が国や諸外国の音楽文化についての関心や理解

また、「評価規準の作成、評価方法の研究開発（報告）」（平成 14 年 2 月 国立教育政策研究所）では、絶対評価の一層の重視、目標に準拠した評価などについて、基本的な考え方が示され、評価の在り方が課題となっている。これらのことから、本研究において、次の 5 点を中学校音楽科の課題と考える。

【中学校音楽科の課題】

- ① 音楽的な能力の育成など、基礎・基本の定着を確実に図る指導
- ② 歌唱、器楽、鑑賞、創作の活動を相互に関連付けた題材構成と年間指導計画の作成
- ③ 生徒自らが表現を工夫したり鑑賞したりし、音楽を自分のものとする指導
- ④ 和楽器の扱い
- ⑤ 音楽活動の指導と評価

3 生徒や所属校音楽科の実態をどのようにとらえるのか。

研究員所属校は計9校あり、それぞれ、地域の実態も生徒の実態も様々である。また、各所属校の音楽科の指導にも特色があり、実態として絞り込むことは難しい。そこで、次の方法で生徒の実態及び所属校音楽科の実態を整理する。

- ① 各所属校生徒の実態を短い言葉でカードにたくさん書き出し、KJ法により、実態として大きくまとめる。
- ② 学習過程に視点を当てた調査を生徒に対して実施し、数値化したものから、およその傾向を読み取る。また、その結果を指導に生かすようにする。
- ③ 各所属校の3学年分の音楽科年間指導計画を、歌唱、器楽、創作、鑑賞の柱から実施時数を集計し、指導の偏りがないか分析する。

その結果、生徒の実態及び所属校音楽科の実態を、次のように押さえる。

(1) 生徒の実態

- ① 様々なメディアから流れる音楽に興味をもっている。
- ② 楽曲や音楽活動への興味・関心のある生徒は、自己目標を強くもつ。(P.7 参照)
- ③ 音楽を楽しもうとする姿勢はあるが、自分で表現を工夫しようとする力が身に付いていない。
- ④ 小学校の段階から楽器を習っている生徒が、比較的多い。

(2) 所属校音楽科の実態

- ① 1学年当たり 10～12 題材と、1題材の平均時数を短くし、すべての内容が網羅されるよう、題材構成を工夫している。
- ② 歌唱、器楽、創作、鑑賞で割合を比較すると、歌唱が最も多く、創作、鑑賞が非常に少ない。
- ③ 和楽器を扱った題材を計画しているが、楽器の準備や指導方法について、具体的な指導計画が作成されていない。
- ④ 歌唱では、合唱コンクールなどの学校行事と関連を図り、効率的に指導できるよう指導計画を工夫しているが、一部では、昨年度の指導計画に準じて実施している。

4 研究主題をどのように設定するのか。

これまで述べてきた様々な実態を把握した結果、次のようなキーワードが研究主題を設定する要素になるものと考えられる。

創造性、主体性、指導と評価、歌唱・器楽・創作・鑑賞の関連、和楽器の扱い

そこで、研究主題を次のとおり設定し、副主題に「合唱、和楽器、鑑賞の指導と評価」とすることで、具体的な指導の場を明記することとする。

【研究主題】生徒が主体的に音楽をつくりあげる指導の工夫
－合唱・和楽器・鑑賞の指導と評価を通して－

Ⅱ 研究の内容と方法

1 「主体的に音楽をつくる」をどのように受け止めるのか。

「新しい学力観に立つ音楽科授業の工夫」（文部省、平成7年10月）では、創造的な学習活動の累計として、次の3つを挙げている。

- ① 既存の音楽作品（歌唱曲や器楽曲など）を自ら工夫して演奏したり、積極的にそのよさや美しさを感じ取りながら聴いたりする活動。
- ② 既存の作品とのかかわりを通して、子どもたちがより広がりのある音楽表現を工夫していく活動。
- ③ 子どもたちが自分自身の考えに基づいて、自分たちなりの新しい作品をつくり上げる活動。

創造的に活動することは、生徒が主体的に活動することにほかならず、本研究ではこれら3つを「生徒が主体的に音楽をつくる」活動と考える。

2 目指す生徒の姿をどのように設定するのか。

「1 研究主題設定の理由」で述べた課題や実態を踏まえ、主体的に音楽をつくる活動をイメージし、次の目指す生徒像を設定する。

- ① 新しい教材や音楽活動に対し、興味・関心をもっている。
- ② 自分の音楽活動への目標をもち、音楽を工夫して表現する。
- ③ 目標を達成しようとする。
- ④ 目標達成の満足感や充実感をもち、新たな目標をもつ。
- ⑤ 音楽活動の意味を理解し、自己の向上への欲求をもつ。



3 研究の仮説をどのように設定するのか。

本研究では、これまで、課題や実態の把握、研究主題の設定とその受け止め、目指す生徒像の設定と指導の手だての工夫をするという手順で研究を進めることを述べた。これらを踏まえ、研究の仮説を次のように設定する。

【研究仮説】

目指す生徒像に迫るためには、題材構成や指導の手だてを工夫することにより、生徒は自分の音楽活動の目的や意味を理解し、主体的に音楽を工夫して表現したり鑑賞したりするであろう。

4 目指す生徒の姿に迫る指導の手だては、どのようにあつたらよいのか。

前述の「2 音楽科の課題をどのようにとらえるのか」で述べた、5つの「中学校音楽科の課題」のうち、①や②は題材構成や指導計画作成上の課題であり、③や④は、指導上の課題である。また、「Ⅳ 調査」では、生徒が教材や音楽活動に対し、「最初、興味があっても授業が進むと満足感が少なくなる。」と結論付けている。そこで、計画段階の工夫として「(1) 題材構成・教材選択の工夫」、実施段階の工夫として、「(2) 創造的な音楽活動の工夫」「(3) 指導と評価の工夫」を指導の手だての柱とする。

(1) 題材構成・教材選択の工夫	音楽活動への意欲をもつ題材構成を工夫し、生徒の実態について音楽的な能力からも把握しておく。
(2) 創造的な音楽活動の工夫	音楽活動を創造的な側面からとらえ、生徒が表現を工夫したり、音楽を聴いて自分のものとして受け止めたりするようにする。
(3) 指導と評価の工夫	指導と評価計画を立てることで、生徒の音楽活動を適切に支援し、生徒が目標をもって音楽活動に取り組むようにする。

5 指導の手だてを具体的にどのように考えるのか。

前述の研究仮説を受け、指導の手だての例を次の表のように考え、各実践事例では更に具体的な指導の手だてを工夫することとする。

題材構成・教材選択の工夫	① 音楽活動への意欲をもつ題材構成を工夫するため、題材にかかわる関心・意欲・態度、音楽的な能力から生徒の実態を把握する。 ② 音楽の構成要素及び表現要素、曲想から、音楽表現へのイメージをもつことのできる表現教材や鑑賞教材を選択する。 ③ 表現と鑑賞の関連を図った題材構成を工夫することで、生徒が幅広い音楽表現を選択し、主体的に表現や鑑賞ができるようにする。 ④ 教材を楽曲だけでなく、CDや演奏、音源、楽器、ワークシート等ととらえ、生徒が主体的にかかわることのできる教材を準備しておく。 ⑤ できる限り評価の4観点を設定することのできる題材構成を工夫する。 ⑥ 表現の工夫に重点を置く題材では、簡単に表現でき、音楽の構成要素や表現要素に着目して工夫する教材を選択する。 ⑦ 和楽器を扱う題材では、3年間を見通して題材を構成することで、題材の目標を明確にする。
創造的な音楽活動の工夫	① 音楽活動を創造的な側面からとらえ、生徒が表現を工夫するようにする。 ② 楽曲や音楽活動との新鮮な出会いや生徒が自らのイメージで音楽をつくる姿勢を大切にする。 ③ 生徒自らが表現を工夫したり音楽をつくったりする活動を工夫するとともに、能率的に技能の定着を図ったり、焦点化して音楽を聴くようにしたりする活動を組み合わせることで、生徒の主体性を引き出し、創造的な音楽活動を深めるようにする。 ④ 音楽の構成要素及び表現要素と曲想との関連に視点を当てた指導を工夫する。 ⑤ 鑑賞の指導では、鑑賞の観点を生徒から引き出したり、教師が説明したりして、目的をもって聴くようにする。 ⑥ 和楽器を扱う題材では、五線に頼らない楽譜の活用や口伝による指導を工夫し、生徒が創造的に活動できるようにする。 ⑦ 既習曲や簡単な楽曲を扱うことで、生徒が音楽の特徴を感じ取り、表現を工夫するようにする。
指導と評価の工夫	① 1単位時間ごとの授業のねらいを明らかにしておくことで、生徒が常に音楽活動への見しや目標をもって活動し、教師が適切に評価できるようにする。 ② 指導と評価計画を立てることで、生徒の音楽活動を適切に支援し、生徒が目標を達成できるようにする。 ③ 表現の技能ですぐに向上することが予想される場合は、その場ですぐに指導する。 ④ 教師がさりげなく称賛するなど適切な評価の言葉かけを行うことで、生徒が向上への意欲をもつようにする。 ⑤ 鑑賞では聴く観点を明らかにしておくことで、鑑賞の活動を深めるようにする。 ⑥ 表現を聴き合う場を意図的に設け、自己評価や相互評価が次の音楽活動に生きるようにする。 ⑦ 和楽器を扱う題材では、表現の技能についても目標をはっきりと設定するとともに、相互評価など学び合いの機能を取り入れた指導と評価の工夫をする。

6 実践事例からどのように仮説を検証するのか。

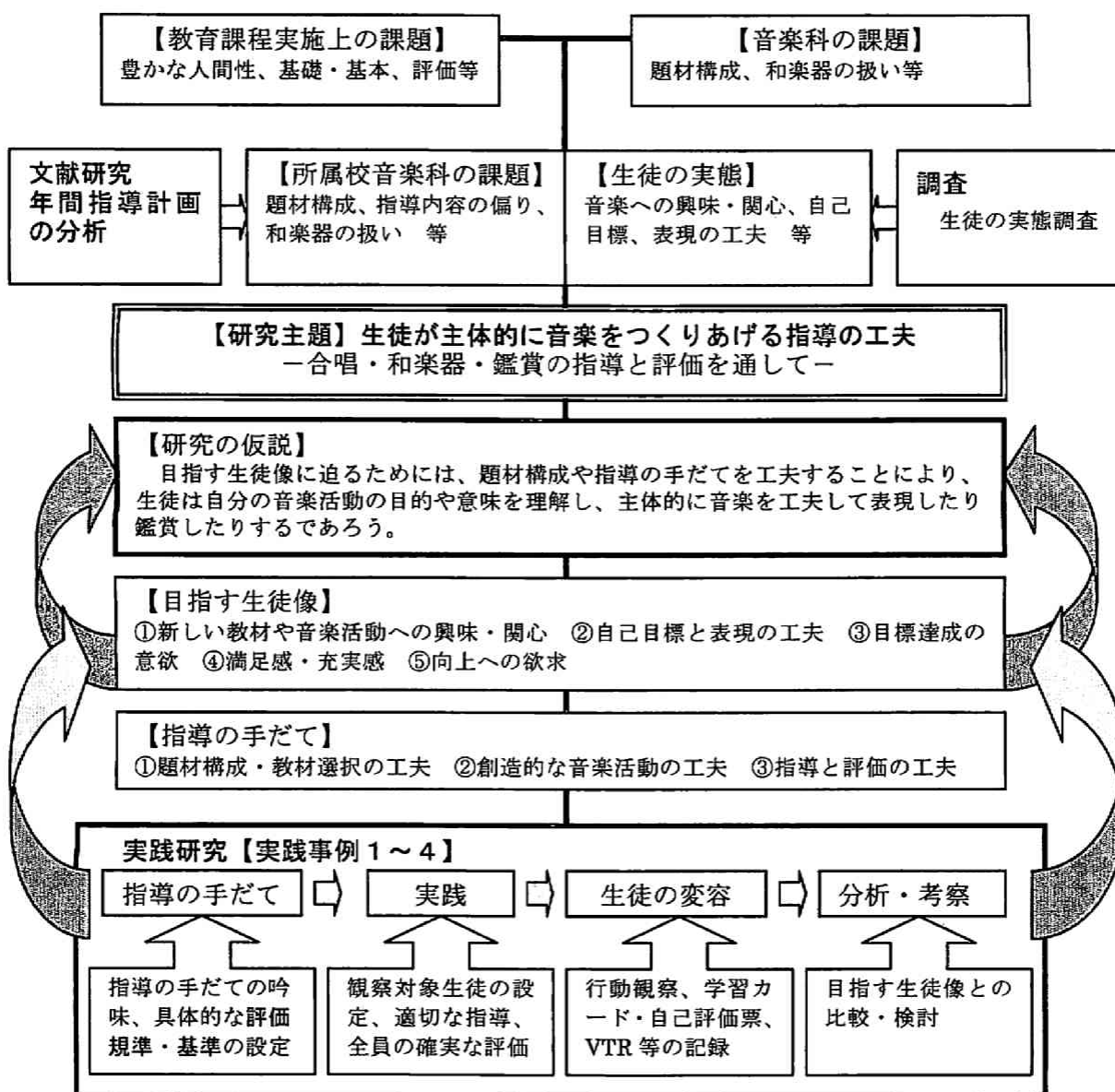
次の手順により、実践事例から仮説に迫る。

- ① 各実践の意図(実践のねらい)を明らかにし、指導の手だてを実践レベルで工夫する。
- ② 主な学習の場面で指導の手だてを打ち、評価規準・評価基準を設定しておく。
- ③ 研究員8人で分担し、評価基準により40人の生徒全員を3段階で評価する。
- ④ 生徒一人一人の活動と評価から、指導の手だての効果を検証する。

7 各実践事例の意図は何か。

実施順	実践の意図	学年・題材名
実践事例1	「音楽の聴き方を学ぶ鑑賞の指導」 鑑賞において効果的な指導を探るため、観点を明確にし、音楽の聴き方を身に付ける指導の工夫について検証する。	第2学年・ オーケストラを聴こう
実践事例2	「地域の人材を生かし、ペアで取り組む三味線の指導」 三味線を扱った題材において、地域の教育力を活用し、「ペア学習」などの指導の工夫について検証する。	第1学年・ 三味線に親しもう
実践事例3	「生徒が自らの音楽をつくり上げる合唱の指導」 合唱の指導を能率的に行い、生徒が自己目標をもち、常に振り返りながら表現を工夫する指導について検証する。	第3学年・ 表現を工夫して感動できる合唱をつくろう
実践事例4	「自分の音楽活動を振り返りながら取り組む篠笛の指導」 繰り返し指導を効果的に行う指導計画により、生徒が自分の技能を高める指導の工夫について検証する。	第1学年・ 篠笛を吹こう

III 研究の構想



IV 調査

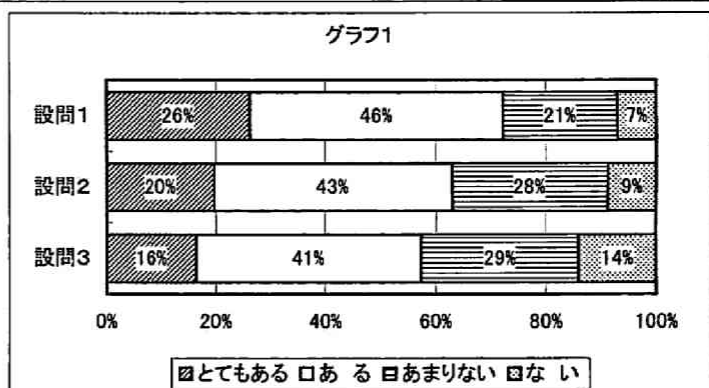
【対象人数】 9校 2541名（第1学年832名、第2学年843名、第3学年866名）

【実施時期】 平成14年9月

【調査目的】 音楽科の学習過程における生徒の意識から、生徒が主体的・創造的に活動する指導の手だてを探る。

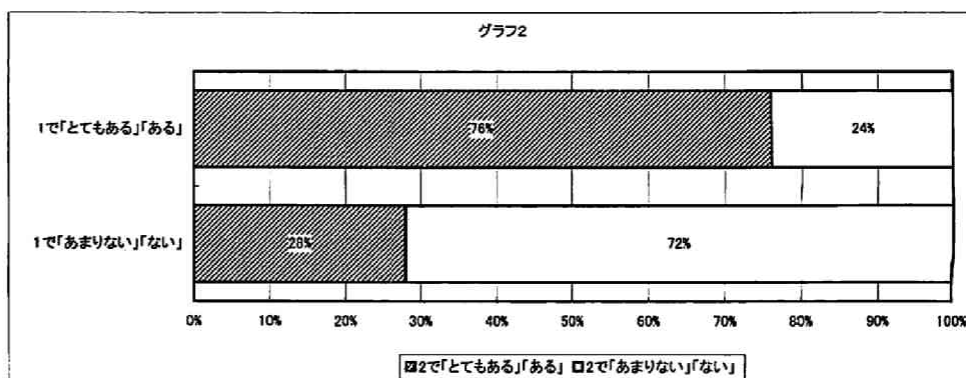
1 最初、興味があっても授業が進むと満足感が少なくなる。

- 設問1 あなたは新しい曲を始めるとき、興味をもつことがありますか。
- 設問2 あなたは授業の中で自分の目標をもって取り組むことがありますか。
- 設問3 あなたは授業の中で満足感や充実感を感じたことがありますか。



2 楽曲や音楽活動への興味・関心のある生徒は、自己目標をもつ。

- 設問1で「とてもある」「ある」生徒(72%)及び「あまりない」「ない」生徒(28%)の設問2との相関関係



設問1で「とてもある」「ある」及び生徒(72%)は、設問2では76%が「とてもある、ある」と回答している。

3 調査の考察

生徒が主体的・創造的に活動するためには、題材構成を工夫し、学習過程で教師が適切に働きかける必要があると考え、以下の4点を指導の手だてを工夫する柱とする。

- (1) 題材の初めでは、楽曲や音楽活動との新鮮な出会いを大切にする。
- (2) 毎時間、常に自分の音楽活動を振り返るようにすることで、生徒が次の自己目標をもつようにする。
- (3) 表現の技能を短時間で身に付けるようにしたり、繰り返し指導したりするようにする。
- (4) 一人一人の生徒が、音楽を構成する要素や表現要素、曲想などをとらえ、自分の表現として創造的に工夫して表現するようにする。

V 実践事例

実践事例

音楽の聴き方を学ぶ鑑賞の指導（第2学年）

【題材名】 オーケストラを聴こう

【題材の目標】

オーケストラを身近に鑑賞することで、楽曲の内容により深く興味をもち、旋律やリズム、楽器の音色、和声を含む音と音とのかかわり合いなどを感じ取り、音楽表現を味わって聴く力を養う。

【題材について】

- ◆本題材は、音楽の聴き方を学ぶ題材で、授業で学んだ聴き方を、オーケストラ鑑賞に生かし、音楽を総合的に理解して聴くようにする。
- ◆題材の初めでは、教材を1曲とし、音楽の構成要素や表現要素と曲想とのかかわりを感じ取って聴くことで、他の楽曲でも聴き方を生かすようにする。
- ◆教材は、旋律やリズム、音の重なりや速度など、音楽の構成要素と表現要素を聴き取りやすい楽曲や演奏とし、オーケストラの楽曲とする。

【教材】

「ボレロ」（ラヴェル作曲）
①リッカルド ムーティ指揮
②バーンスタイン指揮
「カルメン」序曲（ビゼー作曲）他

【実践のねらい】

- ◆本実践で生徒が「主体的に音楽をつくる」とは、生徒が音楽を聴いて自分のものとしてとらえることと考える。特徴をとらえやすい1曲を聴くことにより、楽曲の曲想、リズム、楽器同士のハーモニーなどを聴き取り、聴き方を身に付ける。
- ◆生徒から鑑賞の観点を引き出し、リズム打ちや学習カードへの簡単なメモを使った活動など、生徒の感じ方を生かす音楽活動を工夫する。
- ◆前述の音楽活動に迫るため、本実践では次の指導の手だてを工夫し、その効果を検証することが実践のねらいである。

【生徒・地域の実態】

- ◆テレビなどで流れている曲は興味をもって聴くが、ホールなどでのオーケストラ鑑賞の経験は少ない。
- ◆明るく穏やかで、音楽の楽しさを味わおうとする。
- ◆リズムを正確にとらえて打ち、リズムアンサンブルなどを楽しみながら取り組む。
- ◆合唱や器楽ではハーモニーを聴き合って互いに評価し合い、表現を工夫しようとする。
- ◆音楽を集中して聴こうとし、感じ取ったことを短い言葉でメモすることができる。

【指導の手だて】

1 題材構成・教材選択の工夫

- (1) 音楽の特徴をとらえやすい曲を選択し、音楽を構成する要素を聴き取るようにしたり、聴き比べをして表現要素の違いを聴き取ったりするような教材を用意する。
- (2) 教材を楽曲だけでなく、CDや演奏、音源、ワークシート等ととらえ、生徒が主体的にかかわることのできる教材を準備しておく。

2 創造的な音楽活動の工夫

- (1) 聴き取った構成要素や表現要素をできる限り短い言葉でメモできるよう、ワークシートを工夫し、一人一人の感じ方を表すようにする。
- (2) 鑑賞の観点を生徒から引き出す発問を工夫し、生徒が主体的に音楽を聴くようにする。また、聴き取ったリズムを打つなど、表現活動とも関連させることで、音楽を構成する要素を感じ取るようにする。

3 指導と評価の工夫

- (1) 音楽の構成要素や表現要素、曲想を聴く観点とし、旋律、リズム、イメージなどの具体的な聴き取りの項目として生徒が意識するようにすることで、鑑賞の目的をもって聴くようにする。評価基準は、「鑑賞の観点5項目のうち3項目以上聴きとっている」など、具体的にしておく。
- (2) 教師がさりげなく称賛するなど適切な評価の言葉かけを行うことで、生徒が向上への意欲をもつようにする。

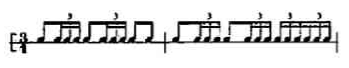
【題材の評価規準】

- (1) 楽曲構成の豊かさや表現の多様さ、楽曲全体の味わいなどに関心をもっている。
(音楽への関心・意欲・態度)
- (2) 旋律やリズム、音色を聴き取ったり、演奏者の違いや意図によって曲想が異なり、音楽の表情が大きく変わったりすることを感じ取っている。
(音楽的な感受や表現の工夫)
- (3) 速度や強弱の働き、及びそれらによって生み出される楽曲の雰囲気や曲想の変化を総合的に理解して聴いている。
(鑑賞の能力)

指導の実際

時	○生徒の活動	★指導の手だて ◇主な評価
1	○楽曲の特徴とは、どのようなことか理解する。 C 長い！ 「15分位の曲」に反応した。 C 特徴って、曲の感じ？ C ゆっくりとか、短調とか C 速度！ C (うれしそうな顔をする。) ○鑑賞の観点を、旋律、リズム、音色、速度、強弱の5つに絞り、学習カードにメモしながら、リッカルド・ムーティー指揮の「ボレロ」を視聴する。  (メモする。)最初はゆっくりで、後で、だんだん速くなる。	★楽曲の特徴について、生徒から引き出すよう発問を工夫する。 ★生徒の発言を、さりげなくほめ、発言への意欲をもつようにする。 T 今日「ボレロ」という曲を勉強します。 <u>15分位の曲</u>です。 T メモ用紙の上に「特徴を自由に書いてみよう」とあります。特徴とは、どんなことが分かるかな。 T そうそう。曲の感じを細かく分析すると、どんなものがある？ T ゆっくりって言うのは、何て言うの？ T すばらしい！ ★生徒の意見をすべて、旋律、リズム、音色、速度、強弱などに集約し、板書カードで示して鑑賞の観点として聴くようにする。 ◇楽曲の特徴を感じ取って、「ボレロ」を聴いている。(鑑賞の能力) A 5つの鑑賞の観点すべてに、1つ以上の簡単なメモを書いて聴いている。(12人) B 鑑賞の観点のうち、3つまでの観点到にメモを書いて聴いている。(23人) C 鑑賞の観点のうち、1つ以下の観点到にメモを書いて聴いている。(1人) 【評価方法】観察、学習カード

○楽曲の特徴について、メモを基に聴き取った内容を発表する。 C 最初はゆっくりで、後でだんだん速くなってきた。 C どんどん楽器が増えてきて、強弱がだんだん強くなってきた。(言い直す)強弱は、最初弱くて、後からだんだん強くなってきたから。 C 速さは一定だった。 生徒は、強弱と速度の意味の違いに気付いた。 ○「ボレロ」のリズムを感じ取って、リズム打ちをする。  ○違う指揮者の演奏と聴き比べる。 【教材】 バーンスタイン 指揮 ニューヨークフィル ハーモニー管弦楽団 C 速度が少し速いので、どんどん盛り上がる感じの演奏になっている。	★生徒が答えやすい発問と雰囲気づくりを工夫する。 T 速度は、どうだった？ T 何で、そう感じたの？ ★強弱と速度をとり違えた生徒について、すぐに否定せず、生徒が気付くようにする。 T みんなは、どうだった？ ★「ボレロ」の速度は、基本的に一定であることを、学習内容として押さえる。 ★小太鼓のリズム譜を提示し、視覚的にリズムを感じ取って打つようにする。 リズム譜  ★違う指揮者の演奏を聴くことにより、表現方法や速度などの違いを感じ取って聴くようにする。 ◇速度や強弱による音楽表現の違いを感じ取っている。(音楽的な感受や表現の工夫) 【評価方法】観察
2 ○鑑賞教室で、オーケストラの演奏を鑑賞する。 【教材】 ビゼー作曲「カルメン」序曲 スメタナ作曲「モルダウ」 ラベル作曲「ボレロ」 等	★音楽を聴き終わったら、楽曲の特徴を旋律、リズム、音色、速度、強弱、その他の項目でメモをするようにする。
3 ○鑑賞教室で聴いたオーケストラの演奏について、聴き取った内容を発表する。 C 最初から全体的に速度が速かった。 C 打楽器の大きな音は、迫力があつた。 C フルート、クラリネットと、順番に楽器が代わっていった。 C 音が波のように流れている感じ。 C バイオリンかな……	★メモを基に、楽曲の特徴を旋律、リズム、音色、速度、強弱、その他の項目について発表するようにする。 T 「カルメン」は、どんな印象を受けた？ T 速度と強弱のことですね。 T 「モルダウ」を聴いた印象は？ T 音色の変化ですね。 T 波の様子は、どの楽器が演奏していましたか。

C もう少し、低い音だった。 ○旋律、リズム、音色、速度、強弱などに注意して「モルダウ」「カルメン」を聴く。 ○手で軽く拍子を取りながら、「ボレロ」を聴く。 ・リズムを意識して指揮をしている。 タッ タカタ タッ タカタ 	T では、弦楽器ということですよね。 ★軽く拍子を取りながら聴き、拍の流れを感じ取るようにする。 ★強弱を意識し、拍子をとって聴くようにする。 ◇意欲的に手で拍子を取りながら聴いている。(音楽への関心・意欲・態度) 【評価方法】身体表現
---	--

【実践のまとめ】

本実践は、鑑賞の観点を明確にし、音楽を聴くことで、音楽の聴き方を学ぶ授業について指導を工夫してきた。効率よく聴き方を学ぶことで、オーケストラの鑑賞に学び方が生き、音楽へのかかわりが深まるものとする。そこで、どのような教師の指導により、生徒が自ら音楽とかかわるようになるのか分析する。

1 題材構成・教材の工夫

適切な教材（楽曲）を選択し、それをどのような意図で、どのように活動として位置付けるかが重要である。第1時では聴き方を学ぶ指導を位置付け、第2時では、鑑賞教室として、生徒が身に付けた聴き方を生かし、自由に鑑賞できるようにした。また、第3時では、これまでの経験を生かし、指揮などの身体表現も取り入れた。授業の展開を工夫した題材構成により、生徒が音楽へのかかわりを、一層深めることができるものとする。

2 創造的な音楽活動の工夫

生徒が主体的に音楽を聴く工夫として、聴く観点を明確にすることを重視した。そのため発問を工夫し、生徒から聴く観点を引き出すようにした。教師の期待する答えがない場合でも、学年の発達段階や実態に合わせて発問することが大切である。次の教師と生徒のかかわりは、その例である。(P.9 参照) この場合、「ゆっくり」を別の言い方で表すようにしたことがポイントであるとする。

T 教師	C 生徒
T1 音楽の特徴とは、どんなことですか。	C1 ゆっくりとか、短調とか。
T2 ゆっくりっていうのは、何て言うの？	C2 速度。

また、小さな学習カードは、短い言葉を簡単に書くことができ、生徒が感じ取った内容をメモするのには効果的である。

3 指導と評価の工夫

本実践の第1時で、教師の「すばらしい。」の一言により、生徒の表情がにこやかになり、鑑賞の活動に対して意欲的になる姿が見られた。タイミングよく言葉をかけることが重要であるとする。

また、評価については、鑑賞の項目を幾つ聴き取っているかなど、具体的に設定することで、的確に見取ることができる。しかし、音楽的な感受については、メモや感想からだけでなく、指揮などの身体表現からも観察して読み取ることが課題である。

【題材名】 三味線に親しもう

【題材の目標】

表現及び鑑賞を含めた幅広い三味線の学習を通じて、我が国に伝わる音楽に興味や親しみをもち、生演奏から三味線独特の表現や曲想を感じ取るとともに、主体的に三味線の奏法や表現を工夫する態度と能力を養う。

【題材について】

- ◆和楽器の扱いは音楽科の大きな課題であり、国際社会に生きる日本人を育成する観点から重要である。
- ◆三味線は弦を皮に打ち付けて演奏し、弦楽器と打楽器の要素をもつ音色が特徴である。
- ◆3年間を通じた指導計画のもと、初めて三味線を扱う題材である。
- ◆三味線の音楽の鑑賞と表現とを関連付けて題材構成している。
- ◆第2,3学年の選択音楽に発展する題材として位置付ける。

【教材】

「さくらさくら」（日本古謡）
「津軽じょんがら節」
（民謡・鑑賞教材）

【実践のねらい】

- ◆本実践で生徒が「主体的に音楽をつくる」とは、和楽器を扱った指導において、生徒一人一人が三味線の表現と鑑賞への思いや願いをもち、意欲的に音楽活動を高めることである。
- ◆三味線を扱った最初の題材において、生徒が音色を感じ取り、三味線の奏法の特徴を生かして表現を工夫する指導の手だてについて有効性を検証することが実践のねらいである。
- ◆3つの指導の手だてについては、題材全体を通して生徒の活動から有効性を検証する。

【生徒・地域の実態】

- ◆テレビなどで放映される三味線の演奏に関心をもっている。
- ◆三味線への取り組みは初めてであり、自分でも演奏したいと願っている。
- ◆明るく穏やかで、学校行事や学級活動に協力的である。
- ◆意欲的に音楽表現し、音楽の楽しさを味わう。
- ◆音楽を集中して聴こうとする。
- ◆地域に三味線愛好家の方がおり、学校での指導に協力をしていただける。また、地域から三味線の寄贈を受けることができる。

【指導の手だて】

1 題材構成・教材選択の工夫

- (1) 三味線の練習と演奏の鑑賞とを関連付けた題材構成を工夫することで、三味線音楽と新鮮な気持ちで出会い、主体的に活動するようにする。
- (2) 生徒が主体的に音楽とかかわる鑑賞教材を選択し、本物の楽器にふれるとともに、ワークシート等の扱いを工夫した題材構成を行う。
- (3) 日本古謡などの既習曲を活用し、聴き慣れた楽曲を教材とすることで、音楽の特徴を感じ取るようにする。

2 創造的な音楽活動の工夫

- (1) 表現と鑑賞の関連を図り、音色や奏法などのポイントを押さえることで、音楽表現のイメージをもち、音色や奏法を工夫して演奏するようにする。
- (2) 文化譜や口伝を利用した指導により、楽譜に頼らず、よい三味線の音を追求するようにする。

3 指導と評価の工夫

- (1) 1単位時間のねらいを明確にすることで、生徒が自己の目標をもって取り組むようにする。

- (2) 教師がさりげなく称賛するなど、適切な評価の言葉かけを行うことで、生徒が向上への意欲をもつようにする。
- (3) 「ペア学習」を取り入れることにより、表現を聴き合う場を意図的に設け、自己評価や相互評価が次の音楽活動に生きるようにする。
- (4) 「4小節弾いている」など、評価基準を数値化し、明確にしておく。

3年間を通じた三味線の指導計画

	題 材 名	題材の目標	教 材	主な学習内容
第1学年	三味線に 親しもう (5時間) ※本題材	三味線及び我が国の音楽に興味をもち、音楽を主体的に学ぶ。	「さくらさくら」 (日本古謡) 「津軽じょんがら節」(民謡・鑑賞)	・三味線の名称や扱い方を知り、基本的な奏法を学ぶ。 ・三味線の演奏を聴き、特徴を感じ取る。 ・音色を工夫して演奏する。
第2学年	民謡に 親しもう (6時間)	民謡のよさを知り、三味線の正しい奏法を身に付ける。	「ソーラン節」 (北海道民謡)	・正しいバチの打ち方を身に付け、よりよい三味線の音を探求する。 ・調弦の仕方を学ぶ。 ・民謡の特徴を学ぶ。
第3学年	三味線を 楽しもう (4時間)	三味線の演奏を親しみ、味わうことで、我が国に伝わる音楽のよさを音楽的に理解する。	「花」 (喜納昌吉)	・三味線のいろいろな調子を学ぶ ・沖縄音階を知り、短い旋律を創作する。

【第2, 3学年選択音楽】「津軽三味線にチャレンジ」(2年生 35時間、3年生 70時間)

【題材の評価規準】

- (1) 三味線の音色や楽器、演奏に関心をもって演奏したり演奏を聴いたりしている。
(音楽への関心・意欲・態度)
- (2) よい音色とバチの打ち方、演奏の速さや強さなどを感じ取り、特徴を生かす工夫をして表現している。
(音楽的な感受や表現の工夫)
- (3) 三味線の基本的な扱い方や演奏の仕方を習得し、簡単な旋律を演奏する。(表現の技能)
- (4) 三味線の音色や奏法、音楽表現の特徴を感じ取って聴いている。(鑑賞の能力)

指 導 の 実 際

時	○ 生徒の活動	★指導の手だて ◇主な評価
1	○三味線の説明を聞く。 ・三味線の種類を知る。 ・三味線主要各部の名称を知る。 ○地域の方による太棹の演奏を鑑賞する。 ・奏法や音色等などの観点をもって聴く。 太棹って、どんな音だろう。 	★説明はできる限り少なくし、早く演奏してみたいという生徒の意欲を大切にする。 ★鑑賞の観点を明確にし、目的をもって聴き、聴き取った内容を簡単な短い言葉でメモするようにする。 〔観点1〕演奏の姿勢 〔観点2〕バチの使い方 〔観点3〕三味線の音色 〔観点4〕音楽全体の感じ

○ペアで交代して、三味線を準備し、音を出してみる。

- ・三味線の準備をする。
- ・T2（地域の方）のバチの持ち方などを見て、ペアの生徒がもう一人に伝える。
- ・音を出してみる。



もう少し
持つ方の手
を上げて。

T 2

◇三味線の音色や奏法、音楽表現を感じ取って聴いている。（鑑賞の能力）

- A 最後まで集中して聴き、4つのポイントを的確に聴き取っている。（12名）
- B おおむね集中して聴き、4つのポイントをほぼ聴き取っている。（18名）
- C 演奏を聴いているが、4つのポイントを半分程度聴き取っている。（2名）

【評価方法】観察・学習カード

★ペアで演奏しない生徒が、地域の方の構えやバチの持ち方などを見て、演奏する生徒に伝えるようにする。

T「〇〇先生の持ち方をよくみて、ペアの人に教えてください。」



★教師が T1、地域の方が T2 という役割を明確化し、ペアの生徒が T2 をよく見てもう一人の生徒に伝えることで、学習の効率を高めるようにする。

2 ○本時の課題を知る。

「さくらくら」を4小節弾こう。

○「二上り」の調弦についてペアで調弦し、「さくらくら」を練習する。

三味線の文化譜



さくらくら

★前回の鑑賞を学習カードから振り返り、演奏のポイントを確認する。

★ペアで協力し合い、正しい音を探して調弦できるようにする。

★三味線の文化譜及び既習曲の活用により、簡単に弾けるようにする。

◇三味線の基本的奏法を身に付け、「さくらくら」を弾いている。（表現の技能）

- A 正しい構えで「さくらくら」を4小節弾いている（14名）
- B 正しい構えを意識しながら「さくらくら」を4小節弾いている。（16名）
- C 正しい構えが意識されずに「さくらくら」を2小節弾いている。（2名）

【評価方法】観察

3 ○本時の課題を知る。

「ばちさばき」の謎を解こう。

○ペアでバチの打ち方を確認し、「さくらくら」を練習する。

バチは太鼓
をたたく
ように！



★前時の学習カードから、生徒の目標がはっきりするようにする。

★三味線のバチと太鼓のバチの関連に触れ、生徒に音色と弾き方のイメージをもつようにする。

◇打ち付けるような音色を感じ取り、よい音を出す工夫をしている。

（音楽的な感受と表現の工夫）

【評価方法】観察

4 ○本時の課題を知る。 これまでの成果を生かして弾こう。 ○ペアで「さくらさくら」を練習する。 その音、いいね。 タイミングよくほめている。 	★前時の学習カードから、姿勢やバチの打ち方などのポイントを確認し、よりよい演奏を目指すようにする。 ★机間指導の際、弾き方をさりげなくほめ、意欲をもつようにする。 ◇三味線の音色や奏法に関心をもち、意欲的に練習している。(音楽への関心・意欲) 【評価方法】 観察、学習カード
5 ○本時の課題を知る。 全員で合わせて弾こう。 ○全員で「さくらさくら」を合わせて弾く。 ・速度や左手のポジションに注意して弾いている。  みんな上手になったね～！	★最初から前時までの学習カードを見て、自分の取り組みを振り返り、自信をもって弾くようにする。 ★全員で演奏している間、机間指導し、うなずいたりサインを出したりして、演奏を肯定的に評価する。 ◇三味線の基本的な奏法を身に付け、簡単な旋律を演奏している。(表現の技能) A 基本的な奏法を身に付け、「さくらさくら」を拍の流れにのり、最後まで弾いている。(9名) B 基本的な奏法を身に付け、「さくらさくら」を最後まで弾いている。(23名) C 「さくらさくら」を4小節程度弾いている。(0名) 【評価方法】 観察・学習カード

【実践のまとめ】

本実践では、三味線を扱う題材において、3つの指導の手だてが有効かどうかを検証するものであり、題材全体を通して、次の成果と課題が挙げられる。

1 題材構成・教材選択の工夫

- (1) 題材の初めに、地域の方の演奏を鑑賞したり、初めて楽器に触る場面でも地域の方に指導をお願いしたりする題材とすることで、生徒は三味線に対して新鮮な気持ちで取りもうちとする。
- (2) 表現と鑑賞の一体化を図るためのワークシートや学習カードの活用は効果がある。
- (3) 日本古謡などの既習曲は、小学校段階から慣れ親しんでおり、読譜の負担を軽減する指導が可能である。

2 創造的な音楽活動の工夫

- (1) 鑑賞のポイントを押さえて鑑賞することで、音楽を構成する要素や表現要素を確実に感じ取る。
- (2) 文化譜の活用により、生徒は一層、三味線の音や演奏に集中する。

3 指導と評価の工夫

- (1) 三味線の演奏技能も含め、毎時間のねらいを明らかにすることで、自己の目標をもって活動する生徒が多くなる。
- (2) 教師の賞賛の言葉や表情・サインなどは、生徒の緊張を和らげ、表現への意欲を増加させるとともに、評価の機能をもつ。ただし、評価方法については、指導者が一人で行うための座席表の活用など、一層の工夫が課題である。
- (3) 生徒同士がかかわりながら学ぶことにより、技能の定着を能率的に行うことができる。また、相互評価の機能により、生徒が自分の音楽活動を他者の視点から振り返ることになる。

生徒が自らの音楽をつくり上げる合唱の指導（第3学年）

【題材名】 表現を工夫して感動できる合唱をつくろう

【題材の目標】

音楽を構成している要素や速度、強弱などから楽曲の特徴と歌詞の内容を総合的に理解し、合唱を工夫して表現する力を養う。

【題材について】

- ◆合唱の指導において、自分たちの表現を工夫し、つくりあげる題材である。
- ◆表現を工夫する視点として、旋律や曲想、速度と強弱などに重点化し、生徒が工夫する観点を明確にした題材である。
- ◆合唱コンクールとの関連を図っており、効率的に表現の技能を身に付けるようにする。

【教材】

「旅立ちの日に」（歌唱）

作詞 小嶋登

作曲 坂本浩美

編曲 松井孝夫

「聞こえる」（歌唱）

作詞 岩間芳樹

作曲・編曲 新井徳英

「時の旅人」（鑑賞）

作詞 深田じゅんこ

作曲 橋本祥路

編曲 松井孝夫

【実践のねらい】

- ◆本実践で生徒が「主体的に音楽をつくる」とは音楽の構成要素や表現要素の中から工夫する項目を絞り、その項目について生徒同士が相談しながら表現を工夫し、合唱することである。
- ◆生徒同士が話し合う中で、曲のイメージを生かして表現を工夫する指導の手だてについて有効性を検証することが実践のねらいである。
- ◆指導の手だてについては次の3つについて題材全体から生徒の活動を通して評価しその有効性を明らかにする。

【生徒・地域の実態】

- ◆音楽に対する関心は比較的高いが、積極的な姿勢にやや欠ける。
- ◆男女問わずピアノなどの楽器を習っている生徒は、5～6名いる。
- ◆学年を追うごとに合唱への意欲が高まり、表現の技能が身に付いてきている。第2学年のときには、比較的難しい合唱曲も歌うことができていた。
- ◆音程とリズムは各パートとも範唱のテープを聴きながら、ほぼ正確にとることができる。ソプラノパートは高音部の声量が乏しい。アルトパートは地声になる生徒が若干いる。男声パートは他のパートを聴きながら歌うことのできる生徒は半数程度である。

【指導の手だて】

1 題材構成・教材選択の工夫

- (1) 同じ楽曲で演奏者の違う鑑賞教材を選択し、表現を工夫する手がかりとする。
- (2) 音楽の構成要素や表現要素に着目し、イメージを広げる教材を選択する。

2 創造的な音楽活動の工夫

- (1) 生徒が自らのイメージで音楽をつくる姿勢を大切にする。
- (2) 音楽の構成要素及び表現要素と曲想との関連に視点を当てた指導を工夫する。

3 指導と評価の工夫

- (1) 1単位時間ごとの授業のねらいを明らかにしておくことで、生徒が常に音楽活動への見通しや目標をもって活動し、教師が適切に評価できるようにする。
- (2) 歌った直後に自分たちのVTRを視聴し、自己評価・相互評価することにより、音楽活動の目標をもつようにする。

【題材の評価規準】

- (1) 歌詞の内容や曲想に合った発声をしようとし、意欲的に楽曲に合った歌唱表現をしようとする。
(音楽への関心・意欲・態度)
- (2) 楽曲から自己のイメージや感情を感じ取り、歌唱表現を工夫している。
(音楽的な感受や表現の工夫)
- (3) 楽曲に応じた発声や言葉の表現を生かし、曲にふさわしい歌唱表現をする技能を身に付けている。
(表現の技能)
- (4) 表現要素によって生み出される曲想の変化や、構成要素を感じ取って聴いている。
(鑑賞の能力)

指導の実際

時	○生徒の活動	★指導の手だて ◇主な評価
1	○「旅立ちの日に」を鑑賞し、楽曲の特徴を聴き取る。 【聴き取る観点】 ①音の重なりとパートのバランス ②声の響き ③表情 ④曲の感じ	★楽曲に興味をもつよう、卒業生の演奏のVTRを視聴するようにする。 ◇楽曲に対して興味をもち、意欲的に4つの観点で聴こうとしている。 (音楽への関心・意欲・態度)
2 3	○「旅立ちの日に」のパート練習をする。 ソプラノA「あまり高い音がなくて歌いやすいね。」 アルトB「しゃべっている時の声になっちゃう。」 男声C「始めが低い音だな。」	◆すぐに身に付く技能は、能率よく指導する。 T「ソプラノは気を抜かずに響きを聴いて。」 T「アルトはのどに力が入らないように。」 T「男声は下あごをしっかりと下げて。」 ◇楽曲に応じた発声や言葉の表現を生かし、自分のパートを歌っている。 (表現の技能)
4	○卒業生がかつて歌った「旅立ちの日に」「時の旅人」を視聴し、速度や強弱の違いを聴き取って自分たちの表現に役立てる。	★焦点化して音楽を聴くことにより、生徒の主体性を伸ばし、創造的な音楽活動を深めるようにする。 ◇表現要素によって生み出される曲想の変化を意識し、感じ取って聴いている。 (鑑賞の能力)
5	○曲想の違いを考えながら、「旅立ちの日に」の速度をいろいろと変えて歌う。 A「前半は」=84だと遅い？」 B「後半は piu mosso だけれど速度はどの位にする？」	★速度の違いによる曲想の変化を考えさせる指導を工夫する。 ◇自分の表現したいイメージや感情を生かし、合唱の表現を工夫している (音楽的な感受や表現の工夫)
6	○歌詞の内容を3つのまとまりに分けそれぞれのまとまりからイメージする言葉・色を話し合っ合唱する。 A「始めは思い出に浸る感じで色は・・・。」 B「真中は自分を奮い立たせている感じ。」 C「雄大な感じもする。」 D「でも、まだ激しさはないから色は中間ばい黄色かな。」 E「最後は悲しいけれど、後ろを	★3つのまとまりに分けることで、イメージする言葉や色を発言させ多く出たものを共通のものとして認識するようにする。 T「それぞれのまとまりはどんなイメージの言葉や色が浮かびますか。」 T「歌詞や強弱をよく見ながらイメージをいっぱい膨らませてね。」 

	向かず、前にも進もうという感じがなあ。」 F「過去から未来に気持ち移っているんだね。色はブルー。」 A「ピッタリ。それなら始めは緑かな。」	◇自分の表現したいイメージや感情を生かし、工夫して合唱をしている。 (音楽的な感受や表現の工夫)						
7	○「旅立ちの日に」の学級で考えた歌詞のイメージを思い出しながら歌う。 生徒が感じ取った「旅立ちの日に」のまとまりごとのイメージ ○自分たちが今歌った映像を視聴しながら、まとまりごとのイメージが表現できているかを視聴する。  ○イメージ通り3つのまとまりを歌っていたかメモする。 C 思い出に浸ったり考えにふけったりしているような感じとは少し、かけ離れているような気がする。もう少し、力を抜いて歌えばよいと思う。 ○範唱のCDを聴き、もう一度イメージをふくらませる。 ○黒板に張られた内容に気をつけ「旅立ちの日に」の仕上げを練習する。 	★黒板に前時にまとめた内容を掲示しておき、楽曲のイメージを確認するようにする。 <table border="1" style="width: 100%; text-align: center;"> <thead> <tr> <th style="background-color: #cccccc;">初めのまとまり 緑</th> <th style="background-color: #cccccc;">真中のまとまり 黄</th> <th style="background-color: #cccccc;">最後のまとまり 青</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td> ・思い出に浸っている。 ・自然を強調している。 ・考えにふけている。 ・希望をもっている。 </td> <td> ・自分を奮い立たせる。 ・未来に希望をもっている。 ・自分に語りかけている。 ・回想 ・雄大 </td> <td> ・悲しいけれど希望に満ちている。 ・悲しいけれど後ろを向かずに前へ進もう。 ・自分を強くもって迷わず突き進む。 ・出発 </td> </tr> </tbody> </table> ★合唱の様子をVTRで撮影した後、すぐに鑑賞し、自己評価・相互評価できるようにする。 A「何だか表情くらーい。」 B「〇〇が、すごくのってる。」 C「思ったより表情が硬いね。」 ★学習カードに楽曲のまとまりごとの感想を記入し、次の課題を見つけるようにする。 【学習カード】(初めのまとまり) 歌ってみると・・・ 思い出に浸るたり考えにふけたりしているような感じとは少し、かけ離れているような気がする。もう少し、力を抜いて歌えばよいと思う。 ◇曲のイメージをもち、調和の取れた合唱の表現を工夫している (音楽的な感受や表現の工夫) A 曲のイメージを明確にもち、調和の取れた合唱の表現を工夫している(30人) B 曲のイメージをおおむねもち、調和の取れた合唱の表現を工夫している。(2人) C 曲のイメージをもつことが少なく、調和の取れた合唱の表現の工夫をしていない。(0人) 【評価方法】観察	初めのまとまり 緑	真中のまとまり 黄	最後のまとまり 青	・思い出に浸っている。 ・自然を強調している。 ・考えにふけている。 ・希望をもっている。	・自分を奮い立たせる。 ・未来に希望をもっている。 ・自分に語りかけている。 ・回想 ・雄大	・悲しいけれど希望に満ちている。 ・悲しいけれど後ろを向かずに前へ進もう。 ・自分を強くもって迷わず突き進む。 ・出発
初めのまとまり 緑	真中のまとまり 黄	最後のまとまり 青						
・思い出に浸っている。 ・自然を強調している。 ・考えにふけている。 ・希望をもっている。	・自分を奮い立たせる。 ・未来に希望をもっている。 ・自分に語りかけている。 ・回想 ・雄大	・悲しいけれど希望に満ちている。 ・悲しいけれど後ろを向かずに前へ進もう。 ・自分を強くもって迷わず突き進む。 ・出発						

○自由曲「聞こえる」の仕上げの練習をする。



○振り返りカードに記入する。



強弱に気を付け、ブレスをしっかりとる。

★生徒の納得のうえ、能率よく指導する。

T「ここでたっぷりブレスをして次のAhを思い切り出して」
全員「(呼吸) Ah」
T「そう！響きが変わったよ。」

★本時の授業及び題材の目標に沿った自己評価の項目を設定し、音楽活動を振り返るようにする。



【実践のまとめ】

合唱の指導では教師の思いや願いのみを伝えようとする傾向が強いため、本実践では生徒の感じ方を引き出し、合唱の表現として工夫する指導の在り方について検証してきた。検証の視点として指導の手だてから、本実践を検証する。

1 題材構成・教材構成の工夫

- (1) 同じ楽曲でも演奏者が違うと、音楽の表現要素は違ったものになる。CDの範唱や先輩の演奏のVTRなど、複数の鑑賞教材の活用により、速さや強弱などに意識を向けることができる。
- (2) 旋律やリズム、和声の特徴が明確な合唱曲を教材とすることで、楽曲の特徴を生かす表現を工夫することができる。

2 創造的な音楽活動の工夫

- (1) 楽曲を幾つかの部分に分け、音楽の醸し出す曲想から色をイメージし、歌い方を工夫するようにすることで、生徒は合唱の表現に意欲をもち、表現を工夫して歌おうとする。
- (2) 生徒の感じる曲想は多様であるが、音楽の構成要素や表現要素と結びつけた指導を行うことで、表現を工夫しやすい。

3 指導と評価の工夫

- (1) 1単位時間のねらいを生徒にも理解するようにし、合唱コンクールなどの目標が分かると、生徒は見通しをもって音楽活動をする。課題としては、合唱という集団での表現の中で、生徒一人一人の目標を更に明確にもつようにし、教師も一人一人の生徒の評価を確実にを行うことが挙げられる。
- (2) 自分自身の演奏の画像を視聴することで、自分の歌う表情を確認し、情意的な側面と技能的な側面での自己評価・相互評価が可能である。また、学習カードや自己評価カードを使うことにより、生徒は自己目標を明確にする。

自分の活動を振り返りながら取り組む篠笛の指導（第1学年）

【題材名】 篠笛を吹こう

【題材の目標】

篠笛の音色や演奏に興味をもち、練習曲やわらべうたなどを演奏することで、我が国の音楽や郷土の音楽に親しみ、大切にしようとする態度と篠笛の演奏技能を養う。

【題材について】

- ◆和楽器の扱いは音楽科の大きな課題であり、国際社会に生きる日本人を育成する観点から重要である。
- ◆篠笛は旋律楽器であり、民謡音階のわらべうたや民謡を演奏することができる教材である。
- ◆本題材では、1回の指導を原則として10分とするが、必要に応じて10分の指導を2～3回分連続して指導する。
- ◆3年間を通じた指導計画のもと、初めて篠笛を扱う題材である。

【教材】

篠笛（個人持ち）

「はじめて篠笛を吹くには」（VTR）

「篠笛の本」（山田隆 他編著）より「とうふ屋さん」「夜鳴きそば」「たこたこあがれ」「ほたるこい」

【実践のねらい】

- ◆和楽器を扱う音楽活動では、生徒や地域の実態を考慮して楽器を選択し、題材構成する必要がある。また、生徒自らが我が国に伝わる音楽を演奏することで、伝統を大切にしようとする態度が育つものと考えられる。
- ◆本実践で生徒が「主体的に音楽をつくる」とは、和楽器を扱った指導において、生徒一人一人が篠笛の音色や旋律に興味をもち、意欲的に音楽活動を高めることである。
- ◆以下に述べる指導の手だてを工夫することにより、生徒が我が国に伝わる音楽に親しみ、自分の音楽表現として感受できるようにすることが本実践のねらいである。

【生徒・地域の実態】

- ◆ピアノや他の楽器を習っている生徒が多く、音楽に対する関心が高い。
- ◆読譜の苦手な生徒が若干いるが、音楽活動に対して真面目に取り組もうとする。
- ◆篠笛については、「早く吹いてみたい。」「どんな音だろう。」など興味・関心をもっているが、我が国に伝わる音楽を演奏したり積極的に聴いたりした経験は非常に少ない。
- ◆第1回目の篠笛の授業では、ほぼ全員が音を出すことができています。
- ◆他の教科でも、学習カードを使って学習したり、自己評価・相互評価をしたりした経験がある。

【指導の手だて】

1 題材構成・教材選択の工夫

- (1) 我が国の伝統的な音楽文化を継承し親しむ観点から、わらべうたや民謡などの既習曲を教材として選択する。
- (2) 3年間を見通した題材を構成し、各学年の題材の目標を明確にしておく。

2 創造的な音楽活動の工夫

- (1) 生徒が興味をもって継続的に表現の技能を高め、基本的な奏法を毎回、反復練習することで、能率的・効果的に技能の定着を図るようにする。そのため、原則として1回の指導時間を10分とする指導計画を工夫する。
- (2) 3～4名の小グループで活動し、互いに気付いたことを次の活動に生かすなど、音色や演奏の仕方などを工夫するようにする。
- (3) 五線に頼らない楽譜の活用や口伝による指導で、生徒の持つ感受性を生かすようにする。

3 指導と評価の工夫

- (1) 「押さえ」や「打ち」など、篠笛特有の奏法に挑戦できるよう、練習のポイントを「篠笛おさらい票」のスマールステップで具体的に示し、活動への見通しや目標をもって活動できるようにする。
- (2) 生徒の自己評価や教師の評価が次の音楽活動に生きるようにする。また、少人数で学び合うことで、相互評価の機能を生かすようにする。
- (3) 相互評価により、友達に認められる喜びを次の活動への励みとするようにする。

3年間を通じた篠笛の指導計画

	題 材 名	題材の目標	教 材	主な学習内容
第1学年	篠笛を吹こう (4時間) ※本題材	篠笛の音色に関心を持ち、我が国に伝わる音楽や郷土の音楽の中で簡単な旋律や民謡などを演奏する。	・とうふ屋さん ・夜鳴きそば ・ほたるこい 等	・篠笛の構え方を身に付け、発音する。 ・運指や簡単な奏法を身に付け、短い旋律を演奏する。
第2学年	篠笛の奏法をマスターしよう (3時間)	篠笛特有の奏法について技能を高め、簡単な民謡を楽しんで演奏する。	・なべなべそこぬけ ・ひらいたひらいた ・うさぎ 等	・「押さえ」や「打ち」の奏法について練習し、篠笛特有の音色で演奏する。 ・甲音を出す練習をする。
第3学年	篠笛で民謡を演奏しよう (3時間)	篠笛で我が国の民謡を演奏したり、重奏で演奏したりする。	・さくら ・こきりこ ・木曾節 ・六段の調べ	・甲音、メリ音を含む民謡を演奏する。 ・篠笛で歌の伴奏をしたり、篠笛を重奏で演奏する。

【題材の評価規準】

- (1) 篠笛の音色や基本的な奏法に関心を持ち、「おさらい票」のステップに従って意欲的に練習している。
(音楽への関心・意欲・態度)
- (2) 篠笛の美しい音色を感じ取り、美しい音色を出すための工夫をして演奏している。
(音楽的な感受や表現の工夫)
- (3) 篠笛の発音や簡単な練習曲、わらべうたなどを練習し、篠笛らしい音で演奏している。
(表現の技能)

指導の実際

◆印の数字は1回で、10分の単位を示す。

◆	○生徒の活動	★指導の手だて ◇主な評価
1～4 一斉指導	○VTRを見て、篠笛の持ち方や奏法を学ぶ。 ○メモした内容に従い、実際に篠笛を構えてみる。 C どうやって持つんだっけ？	★VTRを効果的に使い、篠笛への興味・関心を高めるようにする。 ★VTRを見ながら、大切なことをメモし、後で一つずつ確認しながら練習するようにする。 ★項目を黒板に示すとともに、各項目について一つ一つよい見本と、生徒がしがちな悪い見本を教師がやってみせる。

グループ学習・個別指導

○アンブシャーに注意して、音を出してみる。
・全員の音が出るようになる。

5～7
○「おさらい票」のチェック項目に従って、構え等を一つずつ確認する。
・グループのメンバーがお互いにかけているかどうか確認している。
C 親指の位置はもっとこっち。
C 左肘を正面に向けると指がつりそう…。

○3～4人グループで、アンブシャーに注意し、音を出す練習をする。
C 息が続かない。
C 結構大きな音が鳴ったよ。
C この前は音がでたのに、今日はなかなか鳴らない。

○「五」と「六」の指使いを覚え、3～4人のグループでチェックし合いながら、「とうふ屋さん」を練習する。

・互いに見合いながら「とうふ屋さん」を練習し、指使いや音の長さをチェックしている。

○「とうふ屋さん」が吹けるようになり、グループのメンバーからチェックを受ける。

〇〇さん、できたから、聴いてみて。

「五一六一五六」の長い音が、ちゃんとできている。

○「おさらい票」に、今日の成果をA～Cで自己評価し、次回の目標を書き込む。

★楽器の構えが安定しやすい運指で練習するように指導することで、篠笛の音が鳴りやすいようにする。

★毎回、繰り返しチェック項目を確認することで、基本的な技能の定着を図るようにする。

おさらい票のチェック項目

チェック項目	11/25	12/5	/
左手親指の位置	△	○	
左肘の角度	△	△	
脇の下にソフトボール一個	○	○	
フルーティストスマイル	△	○	
タンギングをしない	○	○	

★すぐに音の出ない生徒については、個別に指導する。

唇の真ん中から、少し強く息を出してみ。

あつ、鳴った。

★少人数のグループで練習し、楽器の持ち方や唇の形などをチェックし合えるようにする。特に、自分では見えない楽器の構えについては、互いに確認し合うようにする。

★運指を数字で表記した楽譜や、口伝を利用した読譜により、簡単に効率的に練習ができるようにする。

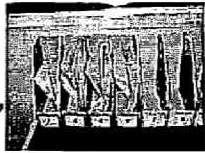
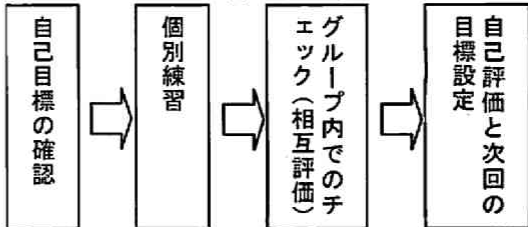
五五「とうふ屋さん」
一六六
六一
五六

★積極的にメンバーに聴いてもらおうとする姿勢を大切にする。

◇正しい奏法で「とうふ屋さん」を演奏している。(表現の技能)

- A 「五一六一五六」を、長い音で最後まで途切れずに演奏している。(6名)
- B 「五一六一五六」が途切れるが、最後まで演奏している。(25名)
- C 「五」と「六」の音を出している。(0名)

★自己評価をする尺度の中で、Aについては、「五一六一五六の長い音が途切れずに『とうふ屋さん』を演奏した場合」など、具体的な自己評価の尺度を示す。

	C 息を長く続けてとうふ屋さんが吹けた。(おさらい票に記入) 2行目の長い音を吹けるようにする。 	★「おさらい票」は、音楽室内のファイルボックスに保管し、生徒も教師も自由に見ることができるようになる。 
8,9,10	○「七」の音を出す練習をする。 ○「夜鳴きそば」を練習する。	★1回の練習時間を10分とし、前述の5～7と同様に、グループでチェックし合いながら練習を進めるようにする。
11,12	○「五と六のピョン」を練習する。 C タンギングした方が簡単でいいな。	【グループでの学習の流れ】 
13～15※	○「たこたこあがれ」を練習する。 C 六のピョンをやるとき笛がグラついて難しい。	★表現の技能の評価は※印の場面で行い、確実に評価する。
16～18	○「三」の指と「ほたるこい」を練習する。 ○それぞれのステップができるようになったら、その都度班員に聞いてもらい、サインしてもらおう。	
19,20※	○これまで練習してきた楽曲を選択し、グループの中で発表会をする。	★生徒が楽曲を選択し、自分のよさを発揮できるようにする。

【実践のまとめ】

本実践では、我が国に伝わる音楽に親しみ、音楽を自分のものとして感受できることを大切にしてきた。ここでは、指導の手だてを柱に考察する。

1 題材構成・教材選択の工夫

既習曲や数字の楽譜、口伝などを教材としたことで、篠笛の技能について、抵抗感が少なくなる。特に、題材の初めでは、2小節程度の教材を用いることで、篠笛を演奏することへの意欲が高まる。

2 創造的な音楽活動の工夫

1回を10分とし、「おさらい票」で技能の目標を具体的に示すことで、スモールステップの活動を繰り返し行い、技能の定着を図ることができる。

3 指導と評価の工夫

「おさらい票」による自己評価と次の目標の設定、少人数のグループでの相互評価は、生徒の自己評価をより客観的なものとする。しかし、10分の時間で毎回評価するのではなく、音楽の感受や技能などがある程度積み上げられた段階で、評価することが大切であり、どの程度の段階で教師の評価を行うか吟味することが課題である。

篠笛は旋律楽器である。生徒の技能が定着した段階では、和太鼓も取り入れ、お囃子などの幅広い和楽器の活用を目指すことが、今後の課題である。

4.1 研究の成果と課題

本研究では、生徒が主体的に音楽活動する姿を想定し、指導の実施前及び実施中の指導の手だてを工夫し、その有効性を検証してきた。次の成果と課題は、4実践事例から共通するものをまとめた。

1 研究の成果

(1) 題材構成・教材選択の工夫

- ① 表現の各内容や表現と鑑賞の関連を図ることで、生徒は多様な表現を味わい、主体的に音楽活動する。
- ② 表現を工夫する教材は、旋律やリズム、和声の特徴、音楽の構成などがとらえやすいものを扱うことで、生徒は音楽を構成する要素に目を向け、表現を工夫する。
- ③ 鑑賞教材として、音楽を構成する要素や表現要素をとらえやすい楽曲は、鑑賞の観点が明確な場合、要素を聴き取りやすい。
- ④ 表現の技能の簡単な楽曲や音楽活動、既習曲などは、表現を工夫しやすい。

(2) 創造的な音楽活動の工夫

- ① 表現を工夫する観点や鑑賞の観点を明確にすることで、生徒は意欲的・創造的に音楽活動をする。
- ② 生徒の演奏を鑑賞教材とする場合は、音楽の表現要素を鑑賞の観点とすることで、生徒は何を聴き取ったらよいのか理解して聴く。「よかったところ」「改善点」などの観点も大切だが、鑑賞の活動とする以上は、鑑賞のねらいを達成できる学習活動とする必要がある。
- ③ 繰り返しの指導では、生徒が自己目標をもち、向上したいという意欲を高めることが重要で、簡単に達成できる技能については、その場ですぐに指導することで、生徒の意欲は高まる。

(3) 指導と評価の工夫

- ① 自己の学習過程を振り返ることは、自分の音楽活動を見つめ、次への目標を生み出す。
- ② さりげなく、タイミングよくほめるなど、教師の評価の言葉は、生徒を意欲的に活動させ、自己の評価基準を明確にしていく。
- ③ 音楽活動に対する自己評価は、教師の評価基準を示すこと、相互評価によって生徒同士が互いの基準を知ることなどにより、一層客観的なものとなる。

2 今後の課題

4実践事例から共通化できなかったもの、あるいは明らかに課題として残るものについて、次の3点に整理した。

- (1) 音楽科の評価の観点を明確に位置付けることのできる題材構成の在り方
- (2) 表現を工夫したり、既存の楽曲を一部つくり直したりするだけでなく、生徒が自分の表現をつくり上げる創作の指導
- (3) 簡単で効果的な評価方法の開発